

長谷川四郎全集
第十一卷

長谷川四郎全集第十二卷

一九七七年一月二〇日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・一八四一(編集)

振替東京六一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七七年(検印廃止)落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集 第十一卷 晶文社



1 ポートの三人 9

2

万里の長城

111

欄外日記

123

石の中の魚

135

祝辞と弔辞

146

3

自立の人

221

海上日出図

223

L・ヒューバーマン、P・M・スウィージー『キューバの社会主義』上・下

224

生と死の彼方にあるもの

225

木島始『跳ぶもの匍うもの』『列島綺想曲』

231

文学とことば

233

バフチン『ドストエフスキイ論』について	234
第九回新日本文学賞小説部門選評	236
ソルジェニーツインのノーベル賞受賞について	237
ソルジェニーツイン『鹿とラーゲリの女』	239
エリ・ヴィーゼル『死者の歌』	242
ベケット作『終盤戦』を翻訳して	244
「石の火」について	247
琴の音色	248
断食芸人	250
酔いどれ船同乗記	253
アンネンコフ『同時代人の肖像』上	256
追悼 小林勝	258
ジイドの側から	259
文章の読み方・読まれ方	260
台本作者の弁	262
小林勝	264
近況	266
『吉田健一全短篇集』	266
『ぼくの伯父さん』おくがき	267

中野重治「菊の花」について 269

安部公房『未必の故意』 272

第十回新日本文学賞小説部門選評 273

キム・ジハについて 276

カミシモ・ワイシャツ・ドラマカン 278

庄野潤三『屋根』 280

「片山敏彦著作集」第五卷解説 281

ゴーバスト 288

吉田健一『文学が文学でなくなる時』 289

金達寿編『金史良作品集（全）』 290

ロビンソン物語 291

風信 294

思い出の『アンナ・カレーニナ』 295

『時間という汽車』 298

西脇順三郎『野原をゆく』 300

G・フィオーリ『グラムシの生涯』 301

冒険・田中千禾夫の 302

作者のノート・12
解題 福島紀幸

314

307

1

ボートの三人

セツケンフタツニクツシタニソク
チリガミサルマタモラッタヨ
ハヨホイハヨホイハヨホイホイ

「兵隊ソング」

1

市役所の復員課の窓口。領収書に拇印をおして、アルパカまがいの紺の背広一着、もらった。つづいて千三百円、領収書に拇印おして受けとった。

それから食券を一枚もらって、拇印をつきだしたら

——子供さん、いけませんよ、といった調子で

「拇印はいりませんよ。」窓口の人が言った。

「指定の食堂へおいでなさい。そうすれば、この食券で、なんでも、いくらでも、たべること、できます。」

「そ、それはなんという食堂。」

「みみよりな話で、勢いこんで言い、それに窓口の人もつりこまれ、どもりがうつった。」

「し、指定の食堂。し、市役所のすじ向いにありますから。いつてごらんなさい。ち、ちゃんとありますから。」

窓口の人は窓口から、くろいしゅすのこてをはめて、しろい手をぬーっとつきだし、黒板に白く復員課とかいた標札をとりはずして、ひっこめ、窓口を内からびしゃり、しめてしまった。

はたして市役所のすじ向いに指定の食堂があり、たしか尾根食堂とかいうのだったが、この指定食堂の営業品はタヌキウドンが一つあるだけで、このタヌキウドンならば食券一枚で三杯くうこと、できたが、そのどんぶりというのが、ほとけさまにそなえるような、それはちつぽけなどんぶりだった。

いつのまにか、くついていると、しのびあして、係りの人がやってきて、ずっとそばに立っていて、その声が窓口の人の声とそっくりで、つぎのように言っていた。

「あなた、ここの職業安定所へいっても、職がありませんよ。だいたいが、職業安定所そのものが、失業中でしてね。」

「職が」とか、「だいたいが」とかいう、その「が」が学校の

「が」のように聞えたが、この件ならば、復員列車に運ばれてきて途中下車し、駅の外へあるきだしたときから、おおよそ見当がついていたことで、それがここで既決の函に入ったようなものだった。

「がらんどどの倉庫みたいな町でしてね。」係りの人はつけくわえた。

「で、どうしろとおっしゃる。」

「そうですね。乗合バスで一時間半。そこへいらつしやい。ドックがありますよ、ひとを募集していますよ、大々的に。ドックの専務取締役は工学博士で、復員者援護協会の会長さんでして。」

「なんという町かい。」

「築港といっていたら、知らないひとありません。」

「バス代、よこせ。」

「どうも、それだけは、だめですな。打ち切り千三百円から支出してくださいよ。そういう当市の条令になっていまして。」

「そうか。ではタヌキウドンをもう一杯。」

「どうぞ、どうぞ。ですが、ござんじですか。これが四杯めですから、追加分十五円、払いこみねがいます。」

「ようがす。」

がりがり頭で指定の食堂へ入っていったときは、兵隊服をきていたが、店内で着換えをして、指定の食堂から出てきたときは、アルパカまがいの紺の背広を一着におよび、それがつんつてんであったらだぶであつたりして、首にタオルをまきつけてい

て、ぬいだ兵隊服は、ひとつ脱いでうしろに負いぬではなくて、らくがきだらけの便所内に、おいてけぼりにした。

芝居の中の古い歌が口から出てきた。

牢屋の番人さつさとさ

わしらは三人とらまえてさ

ドックの町へもういちど

縄つきでつれてつた

「発車オーライ。」

乗合バスが動きだした。

ひとは思いがけない方向へ走っていくことがある。それから数時間後、というのはその日のうちに、またべつの歌が口から出てきたからだ、これはその場その場の、やみくも歌だった。

ドックの町で

コックに会った

コックが言った

修道院に宝物

とりにいくな

ボートでいきやれ

世の中には変ったコックがおるもので……と、紙の上にペンで書いているのでなくて、頭の中で字をひろっているのだ。その一方、手はタイプを打つ。商業用通信文というやつだ。「当社の新製品にたいする貴殿の興味にたいし敬意を表します。」「冒険は

必ずやむくいられるであります。」同時にリンリンリンリンリンリン電話がかかっている。受話器をとる。

コーヒーのコ、レンガのレ、といったぐあいで、これは電報局が電文をつたえる電話だった。「これから飛行機でゆく、到着したら電話する。」

この電文をメモに書きとめ、壁にピンでとめておいた。これは、しかし、壁にピンでとめてメモしておく必要がなかった。「到着したら電話する。」というのであるから、電話のベルが鳴るのを待っておればよい。忘れていても、ベルが鳴るだろうから。しかしピンでとめてしまったのである。とめた以上、そのままにしておいた。ところが、ぜんぜん、そのベルが鳴らなかった。もうとくに飛行機は到着しているはずだったが、電話のベルは鳴らなかった。一日待ち二日待ち三日待った。ベルは鳴らなかった。こうして一年も経ってしまった。この期間中、飛行機の墜落事故は一度もなかったし、電文は壁にはりつけられたまま、かさかさにはあがり、黄ばんでしまった。

「電報うけとったが、さっぱり現われないじゃないか。待人きたらずだ。例のコックは新市街でレストランをやっているといううわさだが、あれ以来、会っていない。きみがきたら、いっしょにさがしてみてもいい。もしみつければ、あいつ、シカのステーキ、おごってくれるだろうよ。カネがないのなら、なんとか工面するから、そう言つてよこせ。」

このような速達便を書いて、いざ出そうとしたら、相手は一個

所に住んでいない男であって、かんじんのアドレスがわからなかった。

徴兵検査のときは、フットボールのような形をしたカボチャがあつて、毎日毎日、そういうカボチャばかりくわされていたので、カボチャの色素で、チンボコのさきまでまっさいふだったが、十三年ぶりに復員して、その日、たまたま通りかかると、昔日のあざやかな黄色は体から消えてしまつていて、顔色うすよぐれ、黄疸患者のような目をしていて、その曲り角のあたりには、あらゆる白い麻の夏服をたちまち黄色く染めてしまうほどの、カレー粉のこげる匂いが立っていた。あれは、あのコックが立てていたのだ。

「くえ、諸君、くえ。」

この「くえ」というのが「ケ」というふうに聞えて、コックの声が今も耳の中にのこっている。

盛大といつてもいいほどに、ハラをすかしていたとき、その一風変わったコックに出会ったのだが、それはちょうど、地下鉄が地上に出てきて見た都会の景色であつて、一月の午後四時の赤い空の高い所に黒い鉄骨だらけの橋がかかっていたのが、ざっと三秒間で電車はまだ地下へもぐつてしまった。あれつきりもうそのコックとは出会っていないし、わざわざ出会おうとも思わない。

一風も二風も三風も変つた、あれはコックだった。

まえに來たことのある町だ。

海はまったく風いっていたが、岸壁には寄せ波がだぶりだぶり。

町はまだ起床していなかった。ニンソカス。ドブの匂い。何十年、何百年と古くなった匂い。これから太陽がのぼってこようとしている、ぼっかりと大穴のあいたような空。浅黄色。雲はない。ふかぶかとしている。むらさき色した倉庫の影。ワラクス。そこにほんの少しうずまいてる風。涼しさ。

まえに來たことのある町だ。

無口な男だったが、酒をいっぱいひっかけると、きゅうにしゃべりだした。時としてアルコールはこういう作用をすることがある。動作のにぶい男だったが、それが平野をとびはねていくウサギの敏しうさで、日曜日の朝早い街路からくる物音を一つのこらずつかまえてやろうと、耳をびんとおったてていたが、その日はとくべつ、街路はいたってしずかなものだった。

乗合バスで運ばれてきたときは、西も東もわからなかったが、ポートで外海から入ってきてみると、だんだんわかってきた。まえにきたことのある町だ。

海に浮んでいる家が船で、陸にすえつけられた船が家で、この

両方にネズミはつきものである。検疫官がどんなにやかましく言い、ときどき、毒ガスでネズミをみなごろしにしても、またぞろネズミは出てくる。それは姿を見せなくても、黒い小さな糞をころがしておいて、それがいることを知らせる。ネズミからみすてられた船はあぶない。その船が出帆して、三日もすると、海のまんなかに沈没してしまう。 *Pass the bottle!*

機関部の油さしで、ほんのしばらく船にのつていたことがあった。船員は会社員である。船舶会社の臨時雇員で陸上勤務だったのが、本人にはわからない偶然から、いきなり海上勤務にまわされたためだった。そして一航海すまずとそれっきりで、海運局発行の海員手帖には「以下余白」のスタンプがおされ、そのまま海員手帖は紛失したし、船舶会社からはクビになって、やがて戦争にばくられて（と、その男は言った）しまったが、あの一航海のとき寄港した町々の一つがこの町で、雨のため荷役がのびて、予定の碇泊期間^{レグイム}三日が九日になった。

「ここも爆弾にやられたらしいが、あんまり戦前と変っていないようだね。」

「しかし町はどれも似たようなものじゃないのかね、きみ。」

「住んでるのは人だぜ。人さまさまさ。」

サイズもちがえば

やりかたもべつべつで

と、どくとくのふしまわしをつけて、その男が言った。

だが行先は同じだ。早い話が船員たちはてんでんばらばらにタ

ラップをふみ、てんでんばらばらに上陸して、てんでんばらばらに街路を歩いて行って、そして、おちあうさはだいたい同じような場所だ。「おまえもか。」と、そこでまた顔を合わせる。

あんまり繁昌していなかったが、この町にもそういう場所があった。夜になると窓に毛布のようなカーテンをかけて、そのカーテンのすぐむこうが、海のまんなかであるかのような錯覚をあたえる。

港町に住んでいる人々は、だいたい二つにわけられる。一つは海と関係のない連中だ。彼らには海は遠くから見た景色。額ぶちの中にある泰西名画だ。せいぜい、海水浴。汐干狩。もう一つは海とは直接関係はないが、海に依存している連中だ。海員相手の商店だ。シンガポールではバラダイス。ベナンでは三人姉妹など、思いつきの名前がくっついていて、海員相手のバーだ。

商売女たちが出沒する。

七つの海の労働者

きたりて種をばらまけど

彼女らののはらはらむことなし

男はつかえつかえ暗誦し、それから酒をぐいと飲んだ。

「だが、その店はそのなんじゃなかった。軽便屋とかいってね、ぐんと地味なもので。それがあの空襲のあったあたりに立っていて、そこのおかみさんというのが、あれはネズミの性というのか。ネズミみたいな人で、船員たちからネズミのおかみさんと呼

ばれていたよ。」

*

始めに空腹があった。

「発車オーライ。」

家財道具などかついだり着のままであったりして、町そのものが引っこしてもするようで、ひとひとが乗りこみ乗合バスはつぎつぎと出発し、腹が正確にへりつつあり、半眠りの状態で、黄色い乗合バスで一時間半。定員超過のバスでキップにハサミが入り、バス代三十円で、バスからおりたところが商店街で、バス停の前に「靴製造卸し小売店」が小旗を立てて立っていて、バスからおりたその足でつかつかと、靴屋の店内へ入っていった。

アルバカまがいの背広一着分、市役所の復員課の窓口から受けとり、それを着こんで、つんつるてんであったりだぶだぶであったりしたが、靴はまだ受けとっていなかったから、靴屋へ入っていったときは兵隊靴のどたどたをはいていたが、いっときして靴屋から出てきたときは、コードバンまがいの、びかびかの、今川焼のように黄色い短靴をはいていて、それがいやでもきゅっきゅっと音を立て、きゅうに羽が足に生え、ひらりひらり、人混みかきわけ走っていった。